鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

第１２４号　Ｈ３０．０２．２８

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目１番１号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

分からないことの効用

三学年主任　徳留　健作

鶴丸高校に転任してきた英語科の教員が、覚悟しなければならないことがある。それは「問題検討」である。四月に赴任してきた次の週から五月実力考査の学年検討が始まる。そしてそれぞれの学年で制作した問題は英語科全員で検討し、改訂されたものを各学年の代表者でさらに検討し、学年で再度改訂されて初めて一つの問題が完成する。その間約一ヶ月。それが終わり五月の実力考査の採点をする頃には六月の中間考査の問題検討が始まる。このように英語科は、定期考査も含めて一年中問題を作成・検討し、自分たちの力量を高め合っている。

その問題作りで他の学校と異なる点がある。それは教材選びである。扱う題材を、外国の書籍から自分で探してこなければならない。しかも、過去何年以内に発行されたもので訳本のないもの等の制約がある。せっかく作っても、その時期の生徒のレベルや難易度等が不適切と判断されるとボツになる可能性が高いため、常に新しい題材を確保しておかなければならない。そこで、私が題材を選ぶ際に留意している点がいくつかある。もちろん生徒の心に残る読後感のよいものを選ぶわけだが、特に大切にしているのは、一回読んだだけでは「よく分からない」部分が含まれていることである。

実はこの「よく分からない」部分が重要で、生徒の思考が始まるスウィッチになるのである。生徒は分かりやすいものを求めるかもしれない。しかし、分かりやすいというのは実は問題で、分かるものばかりに慣れてしまうと人間の思考は停止してしまうようである。そもそもこの世の中の現象は複雑に絡み合っているものが多く、分からないものばかりで、それを解明したり、そこから何かを創造したりしていくには思考に頼らざるをえない。

世の中の便利なものも同じである。便利なものが全てプラスになるとは限らない。私達は不便であるからこそ考えるという作業をする。不便さを何とかしようとすればこそ、そこに知恵が生まれる。便利なものは時に私達の考える力を奪い、想像力や知恵を生まれにくくしているのではないだろうか。

鹿児島大学の中路武士（なかじたけし）准教授は「豊かで鮮やかな困難さに向き合い、分からないという出来事にモヤモヤと悩みながら、複雑な書物の言葉を徹底的に調べ、歴史的・社会的・文化的背景に目をこらして、しっかり精読すること。現在の世の中のニーズからはとてもほど遠い経験だが、ぼくは学生から奪ってはいけないと思うのだ」と言っておられる。私もこのモヤモヤ感が生徒の知的好奇心を刺激し、その謎を解明する原動力となり、物事を探究していくきっかけとなると思う。

晴れて卒業を迎えられる第六十九回生の皆さん、卒業おめでとう。これから待ち構える社会はまさしく先の見通せない「よくわからない」、モヤモヤ感で満たされた社会だと思う。もしかしたら、先人達の知恵や積み重ねられてきたマニュアルでは通用しない世界になっていくのかもしれない。しかし、見方を変えれば、新たな発見が生まれる可能性が高く、いち早くそこに気づけば新しいビジネスも生まれるかもしれない。皆さんはこの鶴丸高校の様々な教育活動を通して、難題に挑み、仲間と共に自ら課題を見つけて克服するという経験を多く重ねてきた。自分では気づかないうちに、社会で生きていくのに必要な思考力や判断力、そして創造力を身につけていると思う。

以前、転任される先生が離任式で話された言葉がある。「大地震が予言できるシステムを作ってください。ひと振り撒けば、放射能が全て消える魔法の粉を作って下さい。皆さんならできるはずです。」さあ皆さんの中に流れる鶴丸イズムを発揮する時がやってきました。待ち構える壁に怯むことなく果敢に挑み、自ら時代を切り開いていってください。今後の皆さんの活躍を期待しています。

最優秀賞に松元さん、高校生の思いを語る。

第二十三回　校内弁論大会

前号で予告・紹介しましたが、二月十三日（火）に校内弁論大会が開催されました。一・二年生から各三名ずつ選出された計六名の弁士が、日常の生活で体験したこと、学校生活をとおして感じたことなどをもとに、自分の考えや思いを熱く語ってくれました。

生徒審査員十名と職員審査員八名の審査の結果、最優秀賞に松元美緒さん（二八Ｒ：演題「こども食堂が変える地域のまなざし」）が、優秀賞には足立萌絵さん（二一Ｒ：演題「筆者達と私の答え」）と、重信茉桜さん（一八Ｒ：演題「愛すべき言葉」）が選出されました。

「こども食堂が変える地域のまなざし」

沖縄県の女子高校生の声：「今年の冬に修学旅行がありますが、お金がないので、行くことができません。お母さんは行かせたいと言って悲しんでいます。私のクラスの友人は皆、修学旅行に行くので、悲しいです。私は時々、他の家庭を羨ましく思います。」

この話を知った時、ショックだった。生まれたところが違うだけで、こんなにも生活が、周りを取り囲むものが、違うのかと。

しかし私は決して悲観してはいない。貧困問題解決に本気で取り組む大人がいることを知ったからだ。

みなさんはこども食堂を知っているだろうか。「子どもが１人でも安心して来られる無料の食堂」と言われており、こども食堂は今全国に三百ヶ所以上あり、鹿児島にも二十数ヶ所ある。私がボランティアとして参加している、森の玉里こども食堂では高校生以下の子どもは無料でご飯を食べることができる。

「こども食堂には貧困の子どもたちがやって来る」そう思ってボランティアを始めた。しかし、こども食堂に来る子どもたちは普通の子どもたち。貧困であえいでいるとは思えなかった。「貧困の子どものためになっているの？」そう思わずにはいられなかった。しかし、何度か参加するうちに、あることに気づいた。ボランティアの男子高校生のお兄さんに肩車をしてもらって笑顔いっぱいの子ども、その様子を嬉しそうにスマホで撮るお母さんの姿。

近くに住んでいるけれど、ほとんど交流はない。そんな地域に、こども食堂があると、そこを訪れる、赤ちゃんからお年寄りまで様々な人と顔見知りになる。食後、子どもたちはこども食堂で出会った友達と遊び、お母さん方は日常生活における悩みなどを話し、新しい繋がりが生まれていく。半年以上ボランティアをし、こども食堂が貧困問題を解決することは難しいと知った。しかし、こども食堂が生む、地域のつながりは、孤独な人を減らすことにつながっている。人間関係の貧困は、着実に解消しているのだ。

来た人はお腹いっぱい食べた後、野菜やお米、パン、お菓子の入ったお土産袋を持ち帰る。こども食堂で子どもがご飯を食べることができるのは、運営を支えている多くの方々がいるからだ。無料で食材を届けてくださる方。食材を調理してくださる方。時間を作ってボランティア活動に参加している方。その人達の存在を知るとき、私は「子どもたちの元気な成長を陰ながら応援しているよ」というメッセージを感じる。

読み聞かせをして「美緒おねえさん」と呼ばれ胸が熱くなる。洗い物を台所まで運んでくれる子どもたちの自然な手伝いが嬉しくなる。遊び回る子ども達を見て、元気をもらう。運営ボランティアを見て、「今もっと頑張ることで、将来、私も、誰かを助けられるかもしれない」と私自身の未来が楽しみになる。

地域にまかれ始めた、つながりの種。それは少しずつだが芽を出し始めている。その成長は簡単ではない。だが、きっと、人々の関心が光となり、地に根を張るのだ。

残念だが、私は悟った。修学旅行に行けない沖縄の彼女のことを私は救ってあげられない。でも、経済的に苦しむ人を救うことはできなくても、人とのつながりの貧困から救い出すことはできる。そして生まれた環境に苦しみ、未来をとざされようとしている人たちを、人とのつながりを感じてもらうことによって支援できる。「あなたのことを応援しているよ、一人じゃないよ。」そういう声が届く社会になるのは、そう遠い未来ではないと信じている。

裁判所による出前授業

二月九日（金）、鹿児島地方裁判所から講師を招き、一年生八十名を対象に出前授業が行われました。福田敦裁判官による裁判の流れや民事事件を例にした裁判の仕組みについての説明に加え、本校の鳥居文恵書記官からは自身が裁判所職員をめざしたきっかけや、やりがいについての話があり、生徒はみな真剣な表情で耳を傾けていました。

３月の行事予定

		３　月	食堂
1	木	**第69回卒業式**	×
2	金	1年救命救急法短期講習	○
3	㊏	1年スタディサポート	×
4	㊐		×
5	月	全校朝会　**7限カット　40分授業** 入学学力検査場設営	○
6	火	**入学学力検査**	×
7	水	**入学学力検査**	×
8	木	国公立大学中期日程試験(3/8～)	×
9	金		×
10	㊏	悠学講座⑩	×
11	㊐		×
12	月	国公立大学後期日程試験(3/12～)	×
13	火		○
14	水		○
15	木		○
16	金	**4,5,6,7限の授業**	×
17	㊏		×
18	㊐		×
19	月	学年朝会	○
20	火	**金曜の授業** 職員研修　**40分授業**	○
21	㊌	春分の日	×
22	木	合格体験を聞く会　**7限カット**	○
23	金	**終業式**　大掃除	×
24	㊏		×
25	㊐		×
26	月		×
27	火		×
28	水	離任式	×
29	木		×
30	金		×
31	㊏		×

生徒自宅学習期間

年度末休業日